そうだ！　薬師寺に行こう

浜田　道雄

奈良薬師寺の西塔が法隆寺の西岡棟梁の手で再建されて大分経つのに、東西両塔が並び立つ建立当時の姿を再現した薬師寺をまだ見に行っていないことに気づいた。

「そうだ！　薬師寺に行こう！」　すぐに決心して奈良へ旅立った。二〇一〇年のことである。

写真家の土門拳さんに七条大池越しの薬師寺を撮った作品がある。大池を前に春日の山々をうしろにした美しい雄大な写真だが、そこには塔が一つあるだけだ。いまなら、土門さんの見ることのできなかった二つの塔が並び立つ「白鳳の薬師寺」が撮れる。その思いが私を逸り立てた。

しかし薬師寺に来てみると東塔では「平成の解体修理」がはじまっていて、塔は工事用の布で覆われ、見ることのできるのは西塔だけ。二つの塔の並び立つ「白凰時代の寺」はそこにはなかった。修理が終わるのは一〇年後だという。

あと一〇年！　その年月は私には絶望的なほど長く思えた。完成のときには私は八〇歳を超えている。とても元気でいるとは思えなかったのだ。

だがその一〇年は瞬く間に過ぎて、二〇二一年に東塔の修理は終った。そして私もまだ元気だった。ところが今度はコロナパンデミックが奈良への旅を阻んだ。

さらに三年。疫病も治まり、修理の終わった東塔が公開されて、薬師寺はようやく「白鳳の姿」を再現したという。私は再び奈良に向かった。

その夏一番の暑さのなか訪れた奈良はよく晴れて、春日の山並みを背にした薬師寺は七条大池の水面にゆったりとその影を映していた。二つの塔に挟まれて遠くに東大寺大仏殿の大屋根も望める。これぞ土門さんが見ることのできなかった「白鳳の薬師寺」だ。なつかしい思いのなかで、私はカメラを向けた。

と、ファインダーのなかの二つの塔のかたちが違っているのに気がついた。新しく建てられた西塔の方が少し背が高く、屋根の勾配も緩やかなのだ。白鳳時代には二つの塔はどちらも同じ姿だっただろうから、これでは「白鳳の薬師寺」の再現とはいえない。二つの「凍れる音楽」は異なるメロディーを紡いでしまう。

だがその疑問はまもなく解けた。生前西岡棟梁は、西塔の東塔との違いについてこう語っていたという。

「時が経てば地盤は沈下し、木材も乾燥する。それを考慮して建てたので、二つの塔は五〇〇年後には高さが、一〇〇〇年後には屋根の傾きが同じになる」

名工の言！　だが、寺が「白凰の姿」を取り戻すのに、まだ一〇〇〇年も待たねばならないとは！